

第六章 木造町神輿

第一節 神輿の概要

(一) 祭礼における神輿

神輿（みこし・しんよ）は神霊が祭礼の際、氏子町内や御旅所などへ渡御するに当たって一時的に鎮座する輿で、担ぎ上げて神行される神の乗り物である。神輿の発祥は宇佐神宮（大分県宇佐市）と言われており、聖武天皇が東大寺を建立した際、その造営に貢献した宇佐八幡神と大神杜女を天平勝宝元年（七四九）に九州宇佐から奈良の都へ、屋根に金色の鳳凰が輝く天皇の乗り物・鳳輦（ほうれん）に乗せてはるばる担いで渡御したのが始まりとされる。平安時代になると近江の日吉大社や京都の祇園社・今宮神社・北野天満宮・大阪の大坂天満宮などでも神輿が作られたといい、奈良・京都を中心に神輿が一般化した。

(二) 神輿の基本構造と名称

1 神輿の祖形

天皇の乗り物である鳳輦は基壇（台座）の上に四本柱（胴柱・堂柱）を立てて四方に帳（とばり）や御簾（みす）を垂らし、柱上に垂木の無い屋根（屋蓋）を置いてその頂部に金色の鳳凰を載せた輿である。屋根の軒先に反り（軒反り）はなく水平で、屋根面は四方に棟が降る宝形造とされ、下部で照り（凹面となる）、上部で起る（凸面となる）滑らかな反転曲面をもつ照り起り屋根とされる。後に屋根頂部には鳳凰に換えて宝珠（ほうしゆ）を載せるものや、柱間に襖や格子戸をはめるものも出現する。

2 神輿の構造と発展

柱で囲まれた胴（堂）部は四角形が原形と考えられ、奈良・平安時代以降定型

化するが、後に八角形や六角形の胴をもつ神輿も出現する。柱は当初、角柱で後に丸柱が出現し、江戸時代後期以降には丸柱が普及する。屋根は垂木のない屋蓋であったが、軒裏に垂木が付加され、仏堂建築と同様にその形式は二軒や三軒、平行垂木や扇垂木など多様な展開を見せる。また、軒先も端部で反り上がる軒反りが付けられ、降り棟（神輿では野筋・隅覆と称する）の先端に蕨手が付くのが一般化する。柱上には直接、梁と桁を組む単純な構造であったが、後に大斗肘木などの簡単な組物が置かれるようになり、江戸時代になると二手先や三手先の斗東も用いられるようになり、詰組や中備の墓股なども採用される。

胴が載る基壇（台座）には、胴を囲むように四周に高欄が廻らされ、高欄の中央に鳥居が置かれる。鳥居の設置は鎌倉時代以降と考えられており、四方に付くのが一般的だが、稀に前方のみや前後二か所のものもある。また、基壇を二重にして鳥居の前に階段を付加した神輿も鎌倉以降には出現する。なお、神輿の細部の部材については、図6-1に一般的な名称を示した。

3 神輿の装飾

神輿の装飾には金属の金工、木材の木工、漆塗りの三種類が用いられる。金工の鍔金具は原初から取り付けられていたと考えられるが、初めは形や図柄も簡単なもので、中世以降発展し、江戸時代には複雑で多様な鍔金具が付けられるようになり、豪華に装飾された神輿が現れる。また、鏡や風鐸・鈴・瓔珞などの装飾金物も次第に豊富になり、神輿は一層華やかに飾られた。

木工は神輿自体が小規模であるためか、それほど多くはないが、江戸時代中期以降に山車や屋台に彫刻装飾が付き始めると神輿にも木鼻や墓股などに採用されるようになり、建築や山車彫刻の彫物師の仕事による一層見栄えのする神輿が出現する。

漆塗りは見た目の美しさと木部の保護を兼ね、黒漆や朱漆が用いられるようになるが、鎌倉時代初期までの神輿は殆どが黒漆塗りで、これはその後も常套

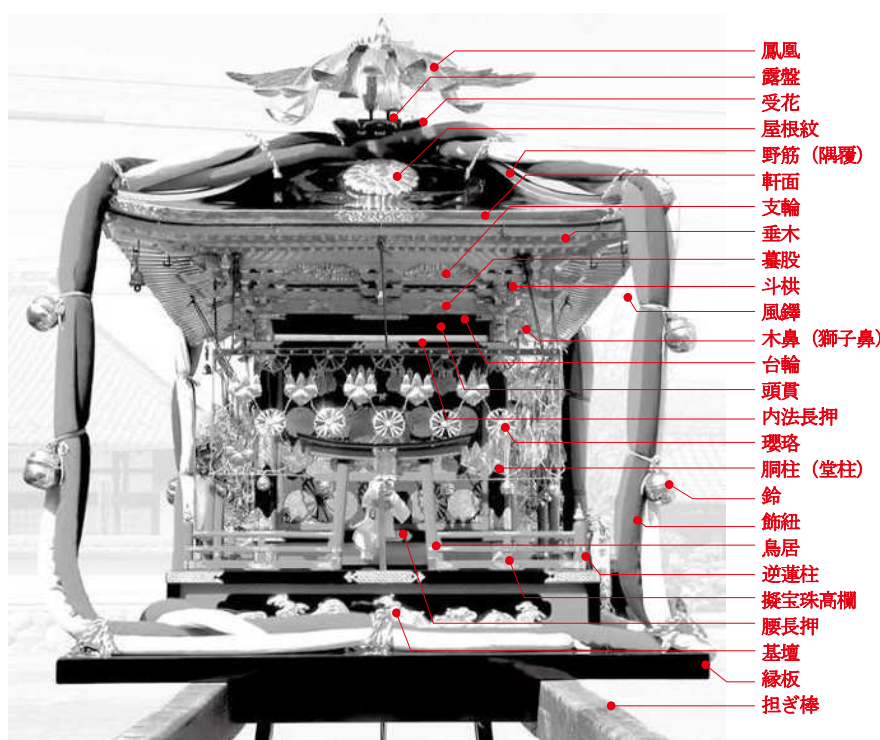


図 6-1 岐阜まつりの神輿の部材名称 (木造町本神輿)

化する。ただし、鳥居や高欄には朱漆が使われる。また、江戸時代後期以降では金箔を使用した煌びやかな神輿も頻出する。

こうした装飾は神輿製作と同時に施されるものもあるが、後世の修理や修復時における美装化に伴い付加されることも多く、神輿自体と装飾部に時代差が生じている場合も少なくない。

第二節 岐阜まつりの神輿の構造と意匠

(一) 岐阜まつりの神輿

伊奈波神社の祭礼で奉芸された木造町の神輿は、本神輿・花神輿・獅子神輿の三基で、いずれも平成九年（一九九七）二月三日に岐阜市重要有形民俗文化財に指定されている。このうち、獅子神輿は一般的な「神輿」とは形状が異なり、内部に獅子頭を載せて巡行する「獅子屋形」である。指定名称では「獅子神輿」とされているが、以前、子供たちが担ぐ「子ども神輿」として使われていたことからこの名称が付けられたと考えられる。

1 伊奈波神社の神輿巡行

伊奈波神社の祭礼において、いつ頃から神輿の渡御が行われたかは不詳であるが、江戸時代後期に成立したとされる『岐阜因幡御神事』（四二頁・資料215）には二基の神輿（布屋町と下矢寫町）が巡行する様子が描かれている。二基はいずれも胴部を四角とした神輿で、屋根は照り起りのある宝形屋根とされ、野筋の先端に蕨手を付し、屋根面には菊と桐の屋根紋を付けている。屋根の頂には露盤宝珠を置き、その上に鳳凰を載せている。胴の柱間には菊と桐の紋を並べた建具をはめ、胴の四方には鳥居を備え、屋根からは飾紐も垂らされている。

基壇や担ぎ棒・担ぎ手などは描かれておらず巡行の様子は不明であるが、画面右上隅に山車曳行の様子とは別に区画されて描かれているので、神輿渡御と山車奉曳が混淆して行われたのではないように察せられる。



資料 6-1 『岐阜因幡御神事』（部分）

明治三十九年（一九〇六）発行の『岐阜稲葉神社祭礼山車引出之圖』（五一頁・資料219）には、山車や踊り山に混じって二基（栄町と忠節町）の神輿が巡行する様子が描かれている。胴や屋根の形状は『岐阜因幡御神事』に描かれた神輿と変わらないが、屋根の頂にはくじやくの飾りが載っている。軒先には提灯が吊られ、基壇の下から四方に担ぎ棒が伸びて神輿の四周を囲むように担ぎ手が描かれている。忠節町の神輿には屋根面に紋様の装飾も付けられている。

これらの絵画資料から、江戸時代後期から明治時代までは伊奈波神社の祭礼で神輿の巡行が行われていたことが分かる。

現存する三基の神輿に関する資料としては、獅子頭を納める木箱の底と蓋に「獅子頭／寶暦五年／亥七月吉辰作之／行年三十四才／賀嶋重主」の墨書があり、宝暦五年（一七五五）に獅子頭が作られたことが分かる。ただし、これが直接現在の獅子神輿の存在や製作を示す資料とは言い難い。これに次ぐ資料としては「本御神輿くじやく」と書かれた紙が貼られた木箱の墨書で、側面に「本」と「安永三年八月」とあり、さらに「花神輿御鈴」の貼り紙がある木箱の蓋には「木造横町什物」「安永三年八朔」の墨書、「子供御輿御鈴」の貼り紙がある木箱には「幸八造／若中／安永三甲午年」の墨書がある。貼り紙はいずれも新しいので、内部に納められたくじやく（鳳凰）や鈴が現在の本神輿や花神輿のものであるか否かは不明であるが、安永三年（一七七四）には木造横町が神輿を所有していたことが確認できる。



資料 6-2 『岐阜稲葉神社祭礼山車引出之圖』（部分）



写真 6-3 獅子神輿



写真 6-2 花神輿



写真 6-1 本神輿



2 木造町の神輿と奉芸

木造横町の町名は、『岐阜志略』（延享四年…一七四七・松平秀雲著 岐阜県立図書館蔵）によると織田秀信の家老であった木造左衛門尉長政の屋敷があったことに由来するといひ、『厚見郡岐阜町絵図』（寛政六年…一七九四 徳川林政史研究所蔵）にも「木作横町 百六間」と記載されている。江戸時代には木造横町と称し、現存する神輿の墨書にもこの町名の記載が幾つか残されている。また、町内には曹洞宗の勝林寺、臨済宗妙心寺派の護国寺、日蓮宗の正興寺、浄土真宗本願寺派の蓮正寺と即得寺が所在し、現在、即得寺境内に整備された神輿蔵（平成九年新築再建）に三基の神輿は収蔵されている。

木造町の神輿巡行は戦後間もなく担ぎ手不足によって中断し、年に一度神輿蔵から出して、虫干しを兼ねた展示を行っていたという。神輿巡行が復活したのは昭和六十三年（一九八八）の岐阜市制100年記念に合わせた岐阜まつり宵宮からである。この年、「木造町神輿奉納委員会」が設置されて奉納が再開され、その後、「三町（木造・矢島・啓運町）神輿奉納実行委員会」（平成四年）、「木造町「町神輿」奉納実行委員会」（平成七年）、「木造町「町神輿」奉芸委員会」（平成十一年）、「木造「町神輿」奉芸委員会」（平成二十一年）などと改組が行われ現在にいたっている。金華十六地区が山車奉曳の当番年や荒天時、東日本大震災の年（平成二十三年）には巡行を取りやめている。

（二）本神輿（岐阜市重要有形民俗文化財 平成九年二月三日指定）

1 歴史・由来

本神輿の製作に関する明確な資料はないが、基壇の裏面三か所に「塗師／上矢 伊助／文政十乙亥年／閏六月から／七月まで／堂立高欄まで／塗□□」「文政十亥七月ぬり 伊助」「文政十乙亥年閏六月から七月まで 堂立より高欄まで塗 上矢嶋町塗師伊助」の墨書があつて、文政十年（一八二七）には現在の

本神輿が存在したことが知られる。この時は上矢嶋町の塗師・伊助によって胴部と高欄の漆塗りが行われたことが分かる。さらに旧鳳凰の羽根を納めた木箱（蓋の表に「本神輿クジャクの羽根」と記された貼り紙がある）には「御輿 木造横町／宇のと里／文化十一年／戌八月吉日」「御輿 うのと里 文化十一年八月／米屋町 作人／佛師 源藏／町内 奉納／千歳 惣吉／全 鉄次郎」の墨書があり、鳳凰の左右の羽根にも「文化十一□戌八月吉日／町内 千歳惣吉／鉄次郎」「町内 □歳 惣吉／寄進 文化十一□」とあり、文化十一年（一八一四）に米屋町の仏師・源藏によって作られた鳳凰（貼り紙には「クジャク」（孔雀）とあり、墨書には「うのと里」（鶴の鳥）と記される）が寄進されたことが知られる。また、基壇の四面に立つ鳥居に取り付けられた「因幡宮」の額金具の裏面には「甲戌 文化十一年七月吉日」「木造横町 什物」「町内 近藤治助作之」「四枚之内」とそれぞれ彫られており、文化十一年に木造横町の近藤治助によつて製作された額が寄進されたことも分かる。

これらの資料により、現在の本神輿が製作されたのは文化十一年から文政十年の間（一八一四～二七）と推定できる。なお、さらに古い資料として「本御神輿／くじゃく」と記された紙が貼られた木箱の墨書がある。「本」「安永三年八月」と記されているが、現在の本神輿の鳳凰は文化十一年に製作されたものであり、神輿自体の建築様式も安永三年（一七七四）まで遡るとは考え難いので、この鳳凰（くじゃく）は現在の花神輿のものではないかと思われる。

文政以後の資料としては、基壇の幕板裏面の墨書に「本神輿箱座／金物／寄進 連中」とあり、続けて寄進者二十九人の名が書かれ、最後に「天保二／第八月／外二／花神輿／御鏡／四面」とあつて、天保二年（一八三一）に基壇の鍔金具の寄進があつたことが知られる。さらに胴柱の鍔金具には「天保三壬辰年七月吉日」と彫られており、本神輿の板屋根裏面には「三□（百か）人講取立／塗諸色世話／人数都合十五人／天保三辰ヨリ／同四巳六月出来／町内 惣

取持／圓七 利兵衛 半兵衛 宇八 吉兵衛 忠兵衛 常藏 勘助 清七 彦兵衛／當時若イ者／善兵衛 儀助 利藏 与八／當時年寄 鉄三／右十五人／塗師鍛冶屋町／勘三郎跡／當時四郎兵衛」の墨書もあり、天保三年（一八三三）にも銚金具の寄進や漆塗りが行われたことが分かる。「本神輿 御鈴」〔鈴四個 鈴八個〕と記された紙が貼られた木箱には「寄進 江州松居氏」の墨書、蓋裏と箱底には「安政五年戊午三月／世話人 綿屋善兵衛／安村屋助藏／同倅 幸助」（蓋・箱同文）の墨書があり、安政五年（一八五八）に鈴が寄進されている。

明治時代以降では、屋根裏に打ち付けられた板札に「明治参拾五年三月／調僭受負人／岐阜市末廣町／藤井源太郎」とあって、明治三十五年（一九〇六）に修繕が行われたことが窺われる。さらに基壇裏側に貼られた紙には「昭和五十七年／十月二十四日／小修繕／広報会長／若染一雄／本部／福井光一／表具／大橋武雄」とあり、基壇幕板の墨書には「木造「町神輿」／大修復／2013 平成二十五年三月／岐阜市木造町十一／福井重光」とあって、その都度、小修理と大修復が実施されている。

2 構造・意匠

本神輿は金銅飾黒漆神輿で、屋根は照り起りのある宝形屋根で、軒は二軒扇垂木とされる。化粧隅木は先端を折り下げて上部に隅木蓋を載せている。屋根面は黒漆塗りで、正背面には菊紋、両側面には桐紋の銚金具が付く。また、屋根の頂部には露盤と八弁の受花を置き、その上に鳳凰を載せている。野筋は金箔押しとされ、蕨手は付けられていない。露盤・受花・鳳凰も金箔押しとされる。



写真 6-4 本神輿 全景

胴部が載る基壇は1550mm四方で、下部に1710mm四方の縁板が付く。基壇の高さは207mmで、上下の框間に朱塗りの幕板をはめ、幕板中央の格狭間を黒漆塗りとし、金箔押しした波彫刻を入れている。基壇上の四周に逆蓮柱の擬宝珠高欄を廻らし、四方の中央に神明鳥居を備えている。高欄と鳥居は朱塗りとされる。担ぎ棒は丸面取りの角材で、全長が4810mm、間隔が980mmとされ、胴の中心から前後左右同寸の位置に配される。前後端で左右の担ぎ棒を繋ぐ円形断面の横材（トンボ）が通される。

基壇上の中央に配される一間四方の胴部は柱間を668mmとし、胴柱は直径60mmの棕のない円柱で、高さ22mmの地覆上に立ち、地覆は基壇内で井桁状に組まれた土居で支えられる。四周の柱間には腰長押・内法長押・頭貫・台輪を廻らし、頭貫端には金箔押しした獅子の彫刻木鼻を出す。腰壁と小壁も金箔押しとされ、柱・長押・頭貫・台輪は黒漆塗りとされる。柱間には朱塗りの額縁を廻らした襖をはめ、襖の表には菊と桐紋の布が張られている。柱上には尾垂木付きの二手先斗棋を載せ、柱間の中央にも同様の斗棋を配した詰組とされる。また、斗棋の間には中備として幕股が置かれ、支輪には雲の彫刻が施される。台輪より上部の軒面までの部材は全て金箔押しとされる。

胴内部の構造は、胴の中央を貫いて屋根頂部まで延びる径120mmの八角断面の心柱が、担ぎ棒の間に架けられた土台上に立つ。胴柱上の斗棋背面には厚板状の桁を廻らし、柱筋より少し内方にも井桁状の梁を組んで上部を固める。また、心柱を貫通する隅行方向の貫を胴柱頂を十字に結ぶように架ける。担ぎ棒の間には心柱を受ける土



写真 6-5 本神輿 胴内部見上げ



台と平行する根太^{ねだ}を胴柱脇に渡し、根太から直径16mmの鉄ボルトを立ち上げて頂部を隅行の貫に固定し、胴の上下震動を抑えている。この鉄ボルトによる補強は昭和五十七年の小修繕より以前に行われていたという。

胴内には床と天井はなく、屋根まで空洞で、現在は根太と土台の下端に鉄板を取り付け、宵宮の際に神輿の屋根や軒裏を飾る電飾や提灯の電燈に使用するバッテリーが置かれる。この改造も近年のものである。

神輿巡行の際には屋根の頂部から四隅の軒先を経て縁板上まで飾紐が垂らされ、紐の途中には鈴が二段に取り付けられる。また、化粧隅木の先端には風鐸が吊られ、胴の四面には瓔珞も掛けられて豪華に装飾される。宵宮では胴の四面に提灯枠を取り付けて提灯が吊られる。

(三) 花神輿（岐阜市重要有形民俗文化財 平成九年二月三日指定）

1 歴史・由来

花神輿の製作年次を示す資料はないが、「花神輿／御鈴」の紙が貼られた木箱の蓋に「木造横町什物」「安永三年八朔」の墨書がある。この鈴箱が現在の花神輿のものであった確証はないが、同じ安永三年八月（一七七四）の墨書がある「本御神輿くじやく」の紙が貼られた木箱の鳳凰（くじやく）は、花神輿のものであった可能性があり、この年には花神輿が存在していたのではないかと推察される。建築様式上も本神輿より時代が古いと考えられ、安永三年頃の製作も首肯できる。

また、本神輿の基壇幕板裏面の墨書に「天保二／第八月／外二／花神輿／御鏡／四面」とあって、天保二年（一八三二）には花神輿が確実に存在したことが分かる。さらに蓋の表に「花御神輿／綱」と書かれた（鉛筆書きか）木箱の裏面には「慶応二年丙寅三月上旬より／木造町ト改／町方年寄／善兵衛／同町清七」とあり、担ぎ棒には「明治十年四月／世話人 藤井吉四郎」の墨書もある。

2 構造・意匠

花神輿は黒漆神輿で、屋根は照り起りのある宝形屋根で、軒は二軒吹寄垂木とされる。化粧隅木は先端を折り下げて上部に隅木蓋が載る。屋根面には美濃和紙を桃色に染めた花飾りを多数取り付けて華やかに装飾され、野筋や蔵手はない。この花飾りが花神輿の名の由来と考えられる。屋根の頂部には露盤と八弁の受花を置くが、現在はその上に鳳凰を載せていない。おそらく「本神輿旧鳳凰」とされている鳳凰が花神輿の鳳凰であったと推察される。

胴部が載る基壇は1210mm四方で、下部に1450mm四方の縁板が付く。基壇の高さは208mmで、上下の框間に四本の縦框を入れて基壇面を三等分し、各間に格狭間を入れている。基壇上の四周に擬宝珠高欄を廻らし、四方の中央に神明鳥居を備えている。担ぎ棒は幅120mmの丸面取りの角材で、全長が4480mm、間隔が850mmとされ、胴の中心から前後左右同寸の位置に配される。前後端で左右の担ぎ棒を繋ぐ横材（トンボ）が通される。

基壇上の中央に配される一間四方の胴部は、柱間を676mmとし、胴柱は45mm角の粽付き唐戸面取角柱で、高さ37mmの地覆上に立つ。地覆は基壇内に井桁状に組まれた土居で支えられ、地覆天端を基壇の床表面と合わせるように納めている。四周の柱間には腰長押・内法長押・頭貫・台輪を廻らし、頭貫端には木鼻を出す。柱間には額縁を廻らした襖をはめ、襖の表には鶴菊紋の彩色刺繍が張られている。柱上には拳鼻・実肘木付きの出組斗拱を載せ、柱間の中央にも同様の斗拱を配した詰組とする。



写真 6-6 花神輿 正面

基壇・胴柱・地覆・腰長押・内法長押・頭貫・垂木側面・軒裏・軒面は黒漆塗り、鳥居・襖の額縁・茅負は朱塗りとされ、基壇の格狭間・胴柱の唐戸面・小壁・木鼻・台輪・斗拱から丸桁間・垂木の下端と木口は金箔押しとされる。

胴内部の構造は、胴の中心から前後400mmの位置で、担ぎ棒の間に幅130mmの大引を架け、この大引間の中央に幅170mmの土台を渡し、この土台上に胴の中心を貫いて屋根頂部まで延びる100mm角の心柱

を立ち上げている。さらに前後の大引を繋ぐように胴の中心から左右265mmの位置に幅85mm（八角）の根太を渡して神輿の台座部分を堅固に固めている。胴柱上の斗拱背面には厚板状の桁を廻らし、さらにその上にも井桁状の梁と心柱を貫通する隅行方向の貫を架けて胴上部を固定する。隅行の貫上には屋根の頂部を支える母屋材が井桁状に組まれている。なお、根太から細い鉄製の角棒を立ち上げ、頂部を鉤状にして隅行の貫に固定し、胴の上下震動を抑えている。この鉄棒による補強は当初からのものと推察される。ただし、根太には手斧はつりの八角断面の部材が使われており、中央部の四面に角孔があげられているので、山車の鯨巻き機構の巻芯が転用されたものではないかと考えられる。胴内には床も天井もなく、屋根までを空洞とする。

神輿巡行の際には胴の四周を璽路で飾ったと考えられる。本神輿の璽路とはほぼ同寸で菊と桐の金物を吊った若干小振りな璽路が残されているので、これが花神輿の璽路であったと推定されるが、飾紐や鈴・風鐸などの装飾に関しては未詳である。



写真 6-7 花神輿 胴内部見上げ

（四）獅子神輿（岐阜市重要有形民俗文化財 平成九年二月三日指定） 1 歴史・由来

獅子神輿は文化財指定名称では「神輿」とされているが、本来は内部に獅子頭を納め、太鼓と共に台座に載せて祭礼時に奉納する「獅子屋形」であろう。

獅子神輿の製作に関する資料はなく、製作年次は不詳であるが、現在の神輿の屋根を収納する木箱の蓋には「寛政四歳／壬子七月吉日／館屋根／木造横町」の墨書があり、裏には「同町大工町／館大工 虎治郎」「同鍛冶屋町／ぬ里師ぬしや」「□立□□／□□□／藤四郎 治兵衛 清藏 辰藏 甚助 玄吉 孫藏 治助 糸藏 魚助／頭／佐兵衛 小太郎」と書かれている。これによって寛政四年（一七九二）には獅子神輿の屋根が大工町の館大工・虎治郎によって製作されていたことが知られる。なお、この墨書から当時この様な屋形（館）や神輿を作る工匠を「館大工」と称したことが知られ、興味深い。さらに獅子頭を収納する木箱には「獅子頭／寶曆五年／亥七月吉辰作之／行年三十四才／賀嶋重主」の墨書があつて、獅子頭が宝曆五年（一七五五）に製作されていることが分かる。したがって、現在の獅子神輿（屋形）が宝暦五年から寛政四年頃（一七五五／九二）には作られていたのではないかと推定でき、神輿の虹梁や木鼻の絵様も一八世紀後半頃の様式を示しており、本神輿・花神輿よりも古い遺構と考えられる。

2 構造・意匠

獅子神輿は屋根を板葺の切妻造・平入とし、頂部には箱棟を載せて両端に鬼板を置いている。軒は一軒繁垂木で、破風の拌み



写真 6-8 獅子神輿 妻面（左が正面）



には蕪懸魚鰭付きを吊る。軒の出が背面より前面の方が90mm程大きいので、屋根の形状は流造のようになり、葺甲部分のみ筋彫りが施されている。また、屋根面と箱棟には正背面とも桐紋と菊紋の鍔金具が取り付けられている。

胴部が載る基壇は611mm四方で、下部に730mm四方の縁板が付く。基壇の高さは40mm程と低く、縁板の四周に逆蓮柱の擬宝珠高欄が廻る。縁板天端から箱棟天端までの高さは970mmで、高欄の擬宝珠柱

の高さは205mmとされる。正面の高欄は逆蓮柱より内側が手前に倒れるようになっており、獅子頭を納める際の工夫と考えられる。縁板より下方の構造は不明で、担ぎ棒などがどのように取り付けられていたかは明らかにし難い。ただし、胴柱は基壇と縁板を貫いて155mm程縁板の下方に伸びており、先端に柄穴があけられているので、胴柱下に台座もしくは担ぎ棒が納まっていたのではないかと推察される。

基壇上の中央に配される一間四方の胴部は、桁行・梁間とも柱間を511mmとし、胴柱は直径43mmの粽付き円柱で直径65mmの木製の礎盤上に立つ。四周の柱間には頭貫虹梁と台輪を廻らし、頭貫端には木鼻を出す。柱間は四面とも開放され建具を入れていない。柱上には実肘木付きの出三斗を載せ、中備に臺股を置く。正背面の斗拱上には軒桁を載せ、両妻面では妻虹梁を載せる。妻虹梁上の中央に大瓶束を置き、束上に大斗実肘木を載せて化粧棟木を受ける。大瓶束の両脇は板壁とされる。胴は四本の細い柱で屋根を支えるだけの華奢な造りである。



写真 6-9 獅子神輿 胴部分組立ての様子

胴内部には鏡天井が張られ、龍の彩色画が施される。屋根・箱棟・破風板柱・礎盤・台輪・頭貫虹梁・妻虹梁・軒桁・大瓶束・妻壁・基壇は黒漆塗り、高欄は朱塗りで、木鼻・虹梁の絵様・斗拱・臺股・垂木の木口・葺甲の筋彫り・懸魚の鰭・鬼板の足は金箔押しとされる。

この屋根は組立式で、祭礼時以外は基壇・高欄・屋根（軒桁以上）・柱（礎盤一体）・頭貫虹梁・台輪・斗拱・臺股にそれぞれ解体されて収蔵されている。

第三節 木造町神輿の特徴

岐阜まつりで奉芸される三基の神輿のうち、本神輿と花神輿は規模をほぼ同じとし、胴を支える基壇は本神輿の方が若干大きい。胴部分は同寸に近い。担ぎ棒上に縁板と基壇を置き、基壇の四周に鳥居を備えた高欄を廻らし、基壇上の一間四方の胴には照り起りのある宝形屋根を載せるなど、基本的な形式も同じである。また、胴の中心に心柱を立てる点や胴上部に心柱を貫通する貫を対角線状に渡し、この貫に鉄製の棒を掛けて根太と繋ぎ、胴の上下震動を抑える構造なども共通する。

両神輿の相違点は、本神輿の屋根は黒漆塗りで屋根紋の鍔金具を付しているが、花神輿では和紙で作られた花飾りが屋根全面に飾られている。また、心柱と胴柱を支える土台と根太が担ぎ棒と直交して架けられているのが本神輿で、花神輿はこれが担ぎ棒と平行に架けられている。高欄は本神輿が逆蓮柱、花神輿が宝珠柱を用い、垂木は本神輿

表 6-1 木造町神輿 主要寸法比較 (mm)

	縁板		基壇		高欄	胴							担ぎ棒		
	長さ	厚さ	長さ	高さ	高さ	胴柱間	胴柱径	胴柱長	心柱径	内法高	棟高	軒出	全長	間隔	径
本神輿	1,710	63	1,550	207	173	667	60 丸	741	120 丸	500	1,560	361	4,810	980	90
花神輿	1,450	60	1,210	208	198	676	45 角	736	100 角	546	1,558	346	4,480	850	120
獅子神輿	730	20	611	30	205	520	43 丸	723			949	前 235 後 145			

が扇垂木、花神輿が吹寄垂木とされている。斗
拱は本神輿が尾垂木付きの二手先とされ、花神
輿は拳鼻・実肘木付きの出組とされるが、両神
輿とも詰組としている。これらの相違点をみる
と、本神輿は禅宗様を積極的に取り入れており、
花神輿は和様を基調としていることが分かる。

構造・意匠とも花神輿の方が簡潔で古風であ
り、本神輿は基壇の波彫刻、中備の臺股や支輪
の雲彫刻など木彫も豊富で、鍔金具も縁板・基
壇・高欄・胴柱・軒面・屋根紋などに多用され
ており、全体に派手な装飾が施されている。こ
うした点は時代の新しさを示すものであり、本
神輿は既存の花神輿を手本にして製作された可
能性を指摘できる。

獅子神輿は本神輿・花神輿とは形式が大きく
異なり、獅子頭を納める屋形（館）である。組
立式の小規模な屋形で、四方を吹放しにした柱
上に切妻造・平入の流造型の屋根を載せる。柱
は粽付きの円柱で礎盤上に立ち、頭貫・台輪を
廻らす点や高欄を逆蓮柱とする点は禅宗様を取
り入れている。

様式的には三基のうち、最も古式で一八世紀
後半には伊奈波神社の祭礼で獅子頭が奉納され
ていたことを示す貴重な遺構である。

神輿本体とは別に特筆すべきは、獅子神輿の

表 6-2 木造町神輿 主要構造・意匠比較

	屋 根					軒・垂木	高 欄			台座構造		
	形 状		野筋	葺手	屋根面装飾							
本神輿	宝形造	照り起り	あり	なし	菊桐紋鍔金具	二軒 扇垂木	擬宝珠高欄	逆蓮柱	神明鳥居	土台・根太は担ぎ棒と直交		
花神輿	宝形造	照り起り	なし	なし	和紙の花飾り	二軒吹寄垂木	擬宝珠高欄	宝珠柱	神明鳥居	大引は担ぎ棒と直交、土台・根太は平行		
獅子神輿	切妻造	平 入			菊桐紋鍔金具	一軒 繁垂木	擬宝珠高欄	逆蓮柱		不 詳		

	胴 部 分									
	胴 柱		胴 柱 間		頭貫端	上下揺留	斗拱・中備		心柱	
本神輿	円柱・粽なし		腰長押・内法長押・頭貫・台輪		獅子鼻	鉄ボルト	尾垂木付き二手先	詰組	臺股	八角
花神輿	唐戸面取角柱・粽あり		腰長押・内法長押・頭貫・台輪		木 鼻	鉄製角棒	実肘木・拳鼻付き出組	詰組		四角
獅子神輿	円柱・粽付き・礎盤		頭貫虹梁・台輪		木 鼻		実肘木付き出三斗		臺股	

屋根を納める寛政四年（一七九二）の木箱に「同町大工町／館大工 虎治郎」の墨書があつて、木造町大工町の「館大工」を称する工匠・虎治郎がこれを製作したことが知られる点である。さらに本神輿の屋根を飾る鳳凰の収納箱に「くじゃく」と記された紙が貼られており、鳳凰を孔雀と称していたことが窺われる。ただし、この貼り紙は近代以降のものと考えられ、明治三十九年（一九〇六）発刊の『岐阜稲葉神社祭礼山車引出之圖』（護国寺蔵）にも孔雀の載った神輿の絵が描かれており、鳳凰と孔雀の混同が察せられる。文化十一年（二八四）の木箱には「うのととり」（鵜の鳥）の墨書もあつて、鳳凰をうのとりと称していたことも知られる。また「米屋町作人／佛師 源蔵」の墨書から、木製の鳳凰が仏師によつて製作されたことも分かる。他にも塗師の名などが書かれた墨書もあり、こうした資料は断片的ではあるが、屋形や神輿の製作に係つた当時の工匠を知る手掛かりとして注目される。

（参考文献）

- 『岐阜市史 通史編 民俗』岐阜市 1977年
- 伊東久之・水野耕嗣「岐阜市文化財指定調査復命書」『木造「町神輿」』1996年
- 水野耕嗣『日本の神輿の変遷略史―神輿の部位による見分け方―』2024年



1 本神輿 全景



3 本神輿 正・側面



2 本神輿 側面



5 本神輿 正面 高欄・鳥居



4 本神輿 正面 胴部



7 本神輿 胴柱下部



6 本神輿 基壇



9 本神輿 正面（祭礼時）



8 本神輿 軒裏見上げ



11 本神輿 正面 担ぎ棒



10 本神輿 背面



13 本神輿 胴上部



12 本神輿 胴部 正・側面



15 本神輿 軒先隅



14 本神輿 桐柱上部



17 本神輿 鳳凰



16 本神輿 屋根側面



19 本神輿 基壇内部見上げ



18 本神輿 桐内部見上げ (心柱)



21 本神輿 側面 (宵宮時)



20 本神輿 基壇内部 (墨書：文政十年)



1 花神輿 正面



3 花神輿 屋根



2 花神輿 正面全景



5 花神輿 担ぎ棒



4 花神輿 屋根頂部



7 花神輿 基壇正面



6 花神輿 側・背面



9 花神輿 胴柱下部



8 花神輿 基壇・高欄・鳥居



11 花神輿 軒裏隅見上げ



10 花神輿 軒裏見上げ



13 花神輿 上山 胴内部見上げ



12 花神輿 胴柱上部 詳細



1 獅子神輿 全景



3 獅子神輿 側面



2 獅子神輿 背面



5 獅子神輿 側面柱上 詳細（胴前柱）



4 獅子神輿 妻部分（左：正面 右：背面）



7 獅子神輿 胴正面 柱上



6 獅子神輿 胴見上げ



9 獅子神輿 天井見上げ



8 獅子神輿 柱上 詳細



11 獅子神輿 組立前の部材



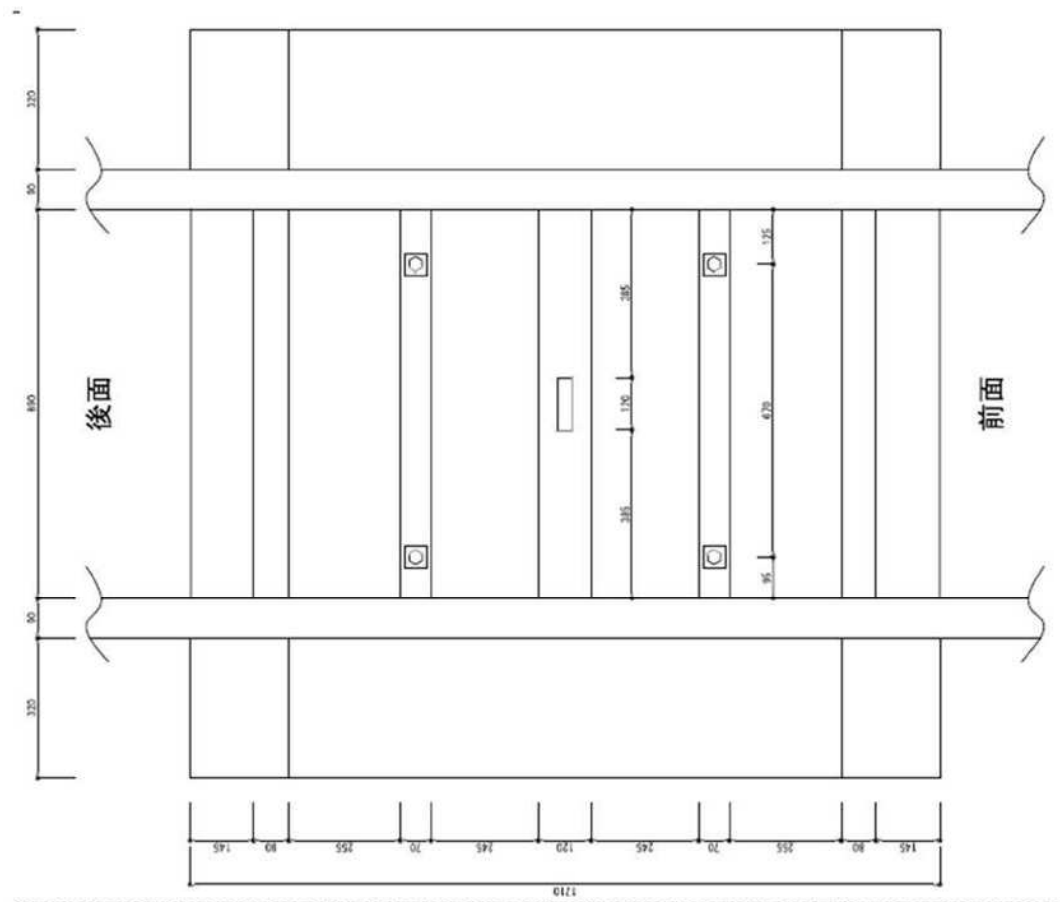
10 獅子神輿 胴軸部 (組立途中)



13 獅子神輿 「館屋根」収納箱 (蓋: 墨書 寛政四年)

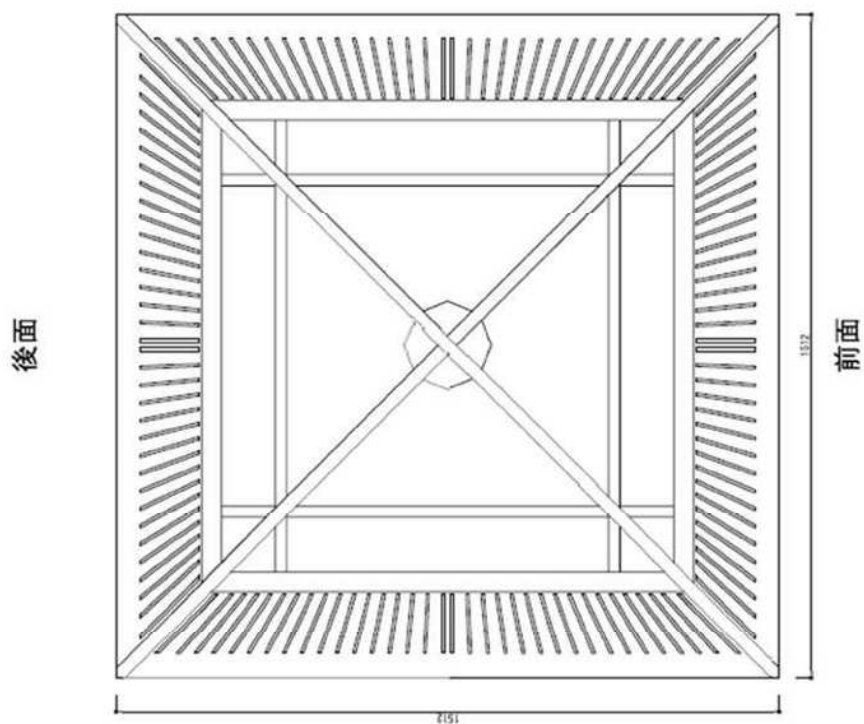


12 獅子神輿 屋根 (箱収納時)



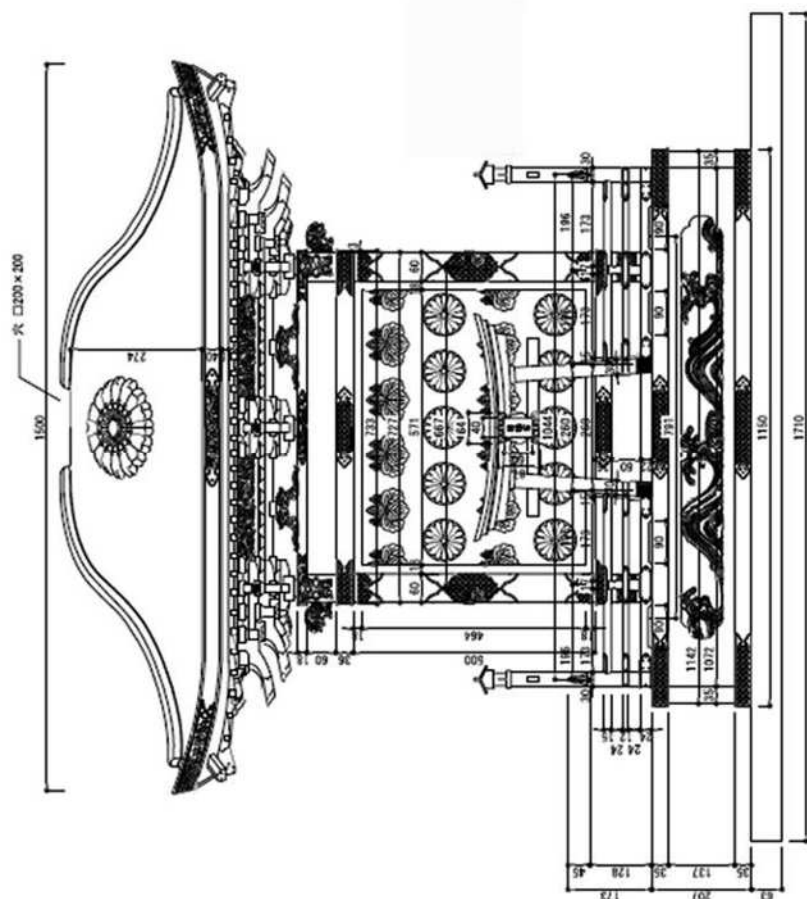
本神輿

本神輿 台座 見上図

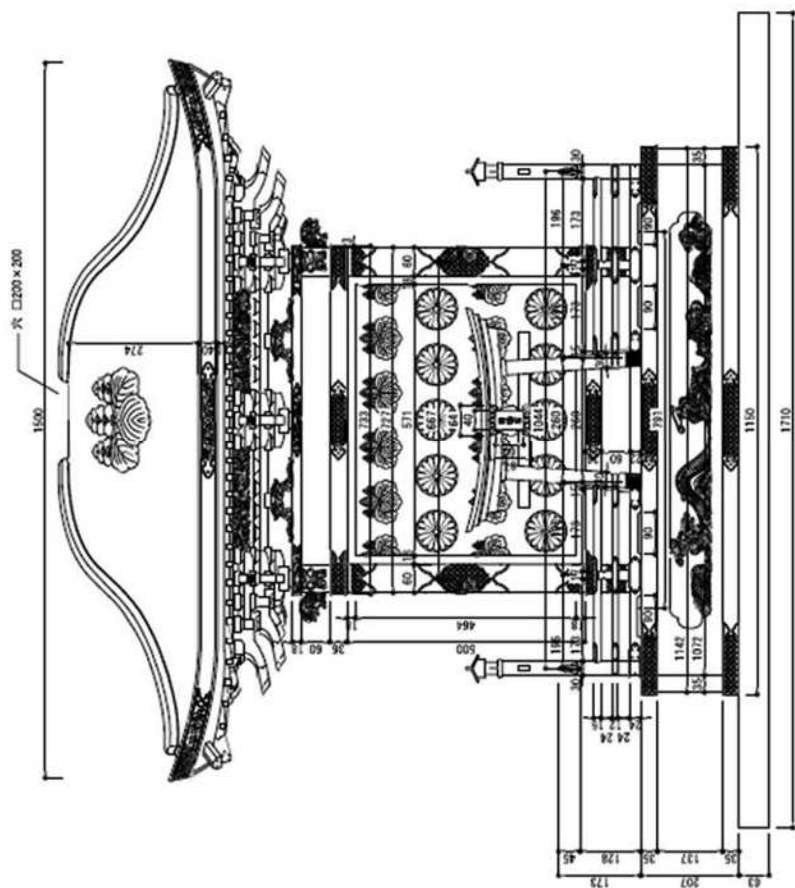


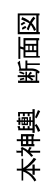
本神輿 天井伏図

本神輿 正面 立面図

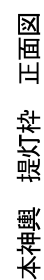


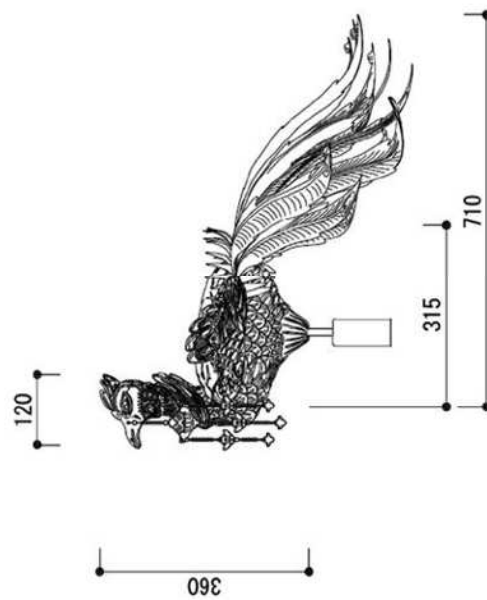
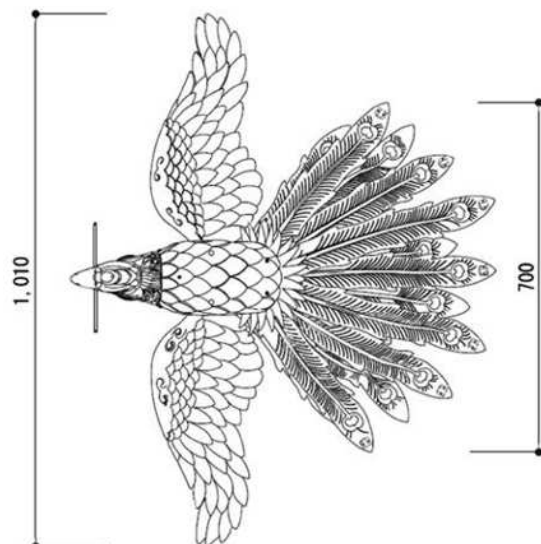
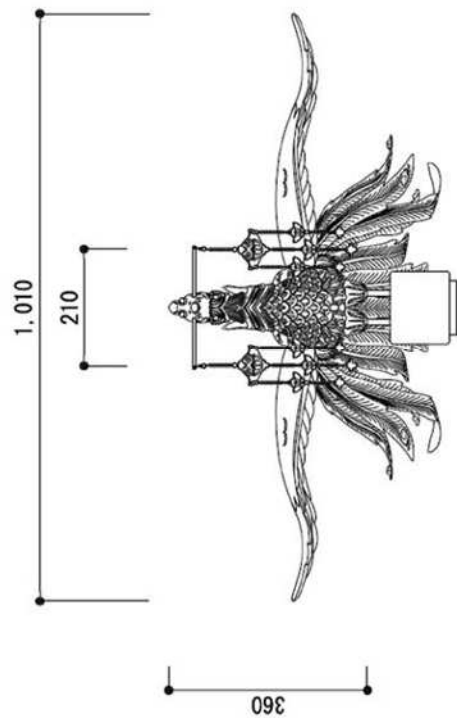
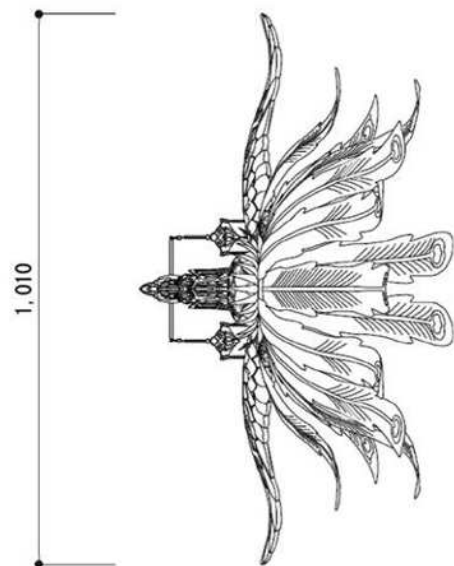
本神輿 側面 立面図





本神輿





本神輿 鳳凰 背面図 (上) 上面図 (下)

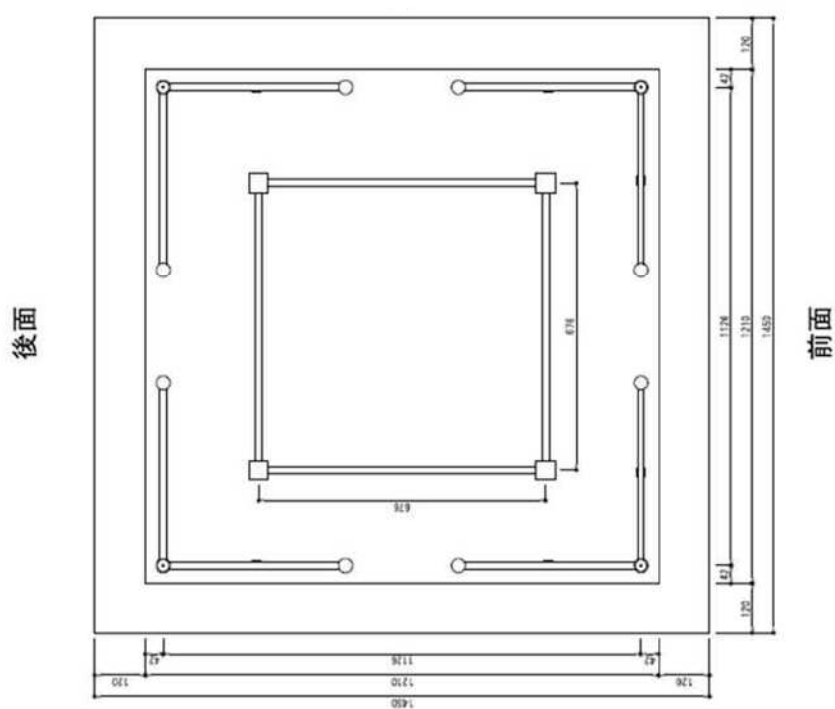
本神輿 鳳凰 正面図 (上) 側面図 (下)

本神輿

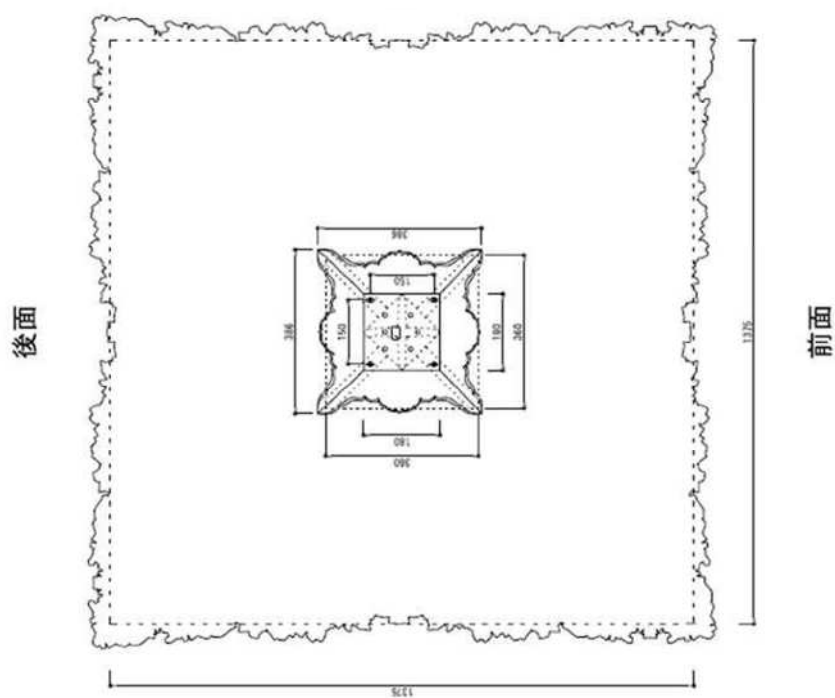


図面 6-2 花神輿

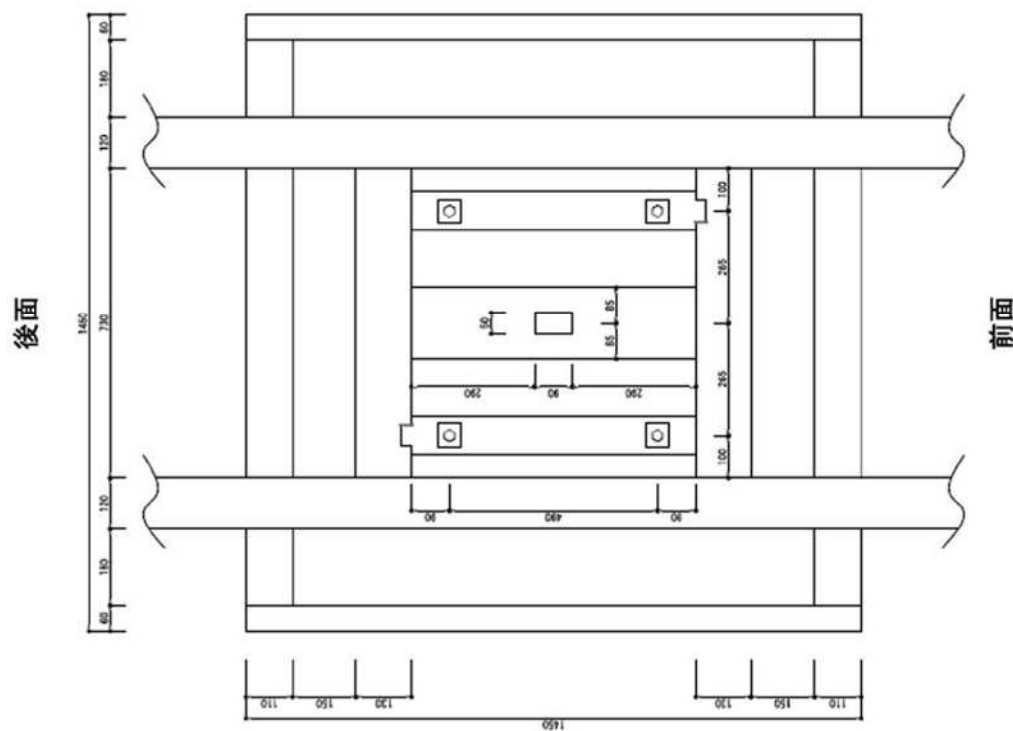
花神輿・基壇・洞平面図



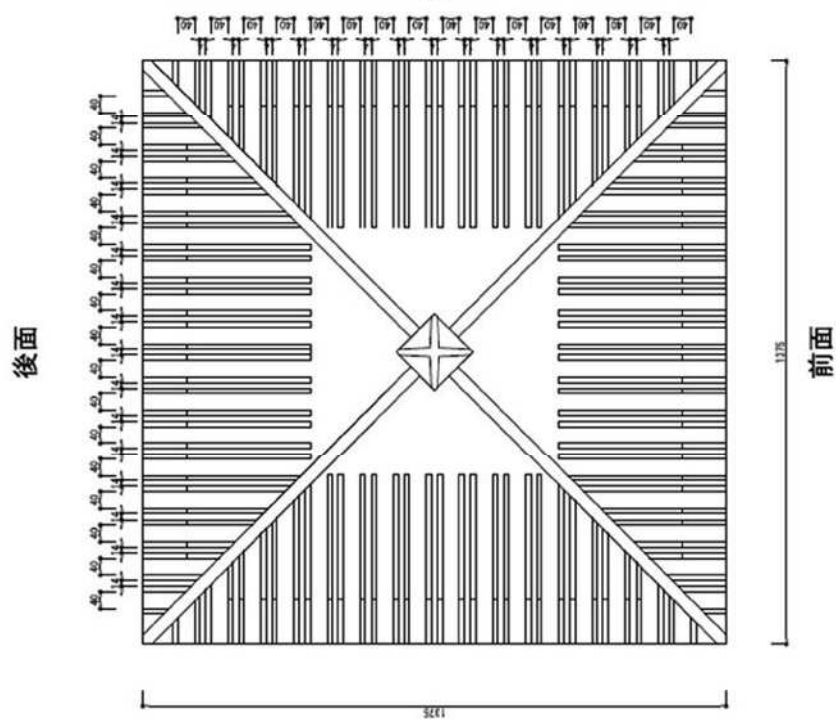
花神輿 屋根伏図



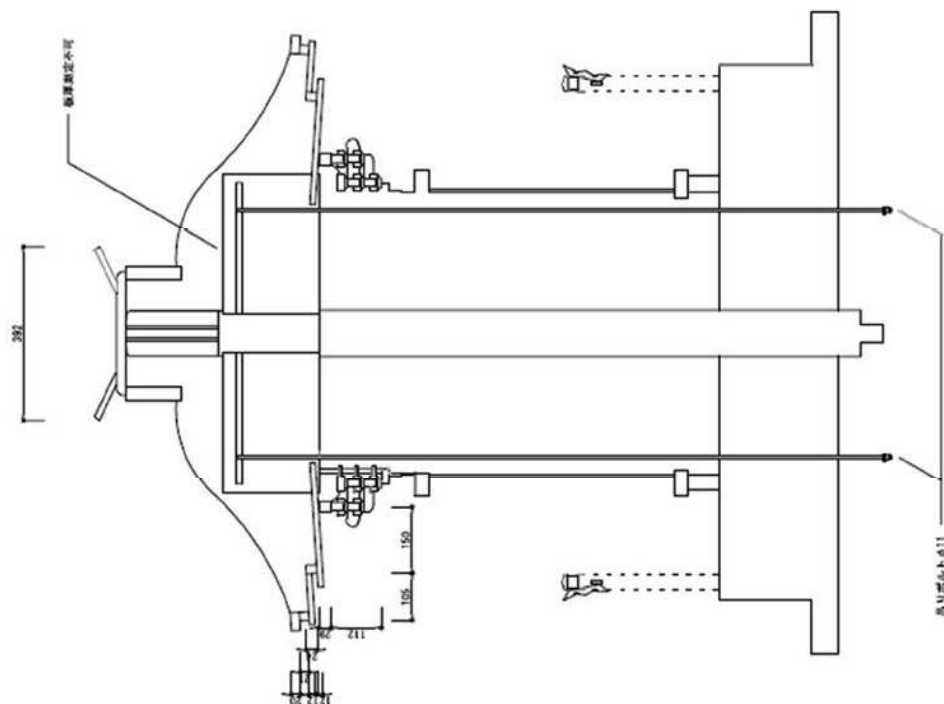
花神輿 台座 見上図



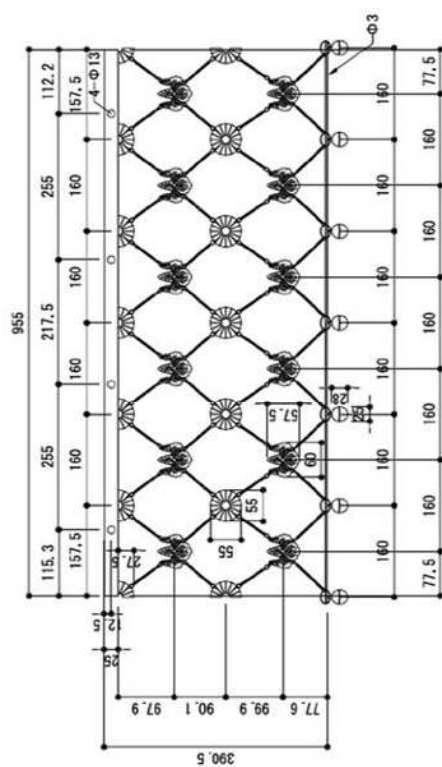
花神輿 天井伏図

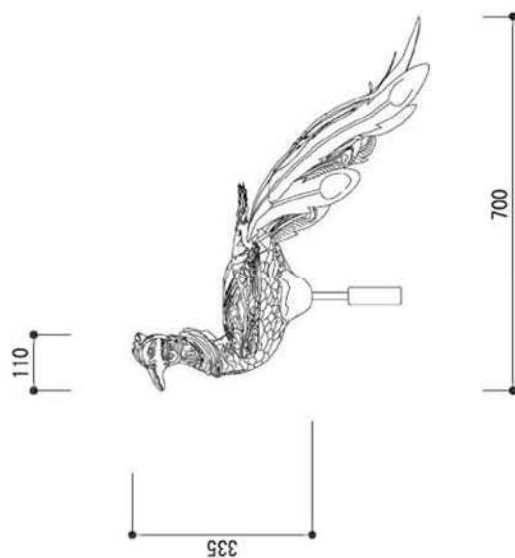
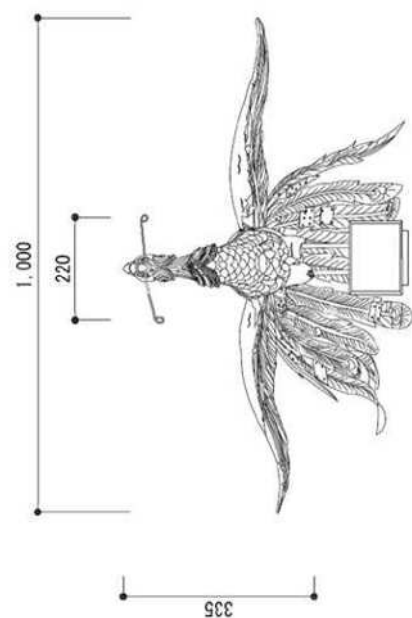


花神輿断面図

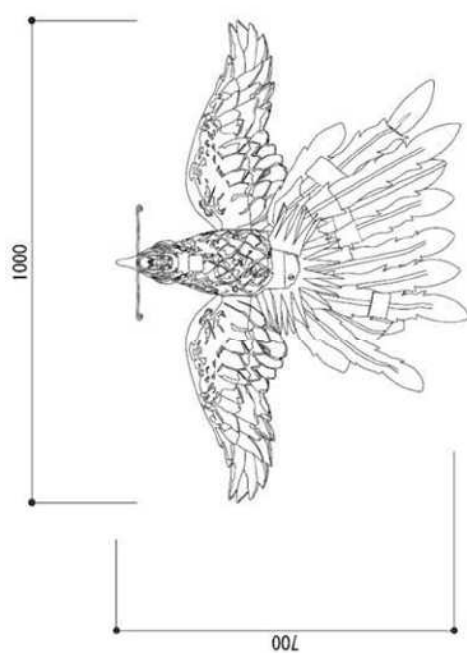
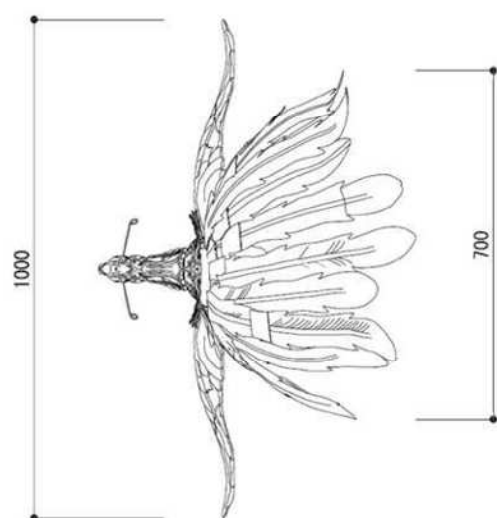


璦珞 正面图





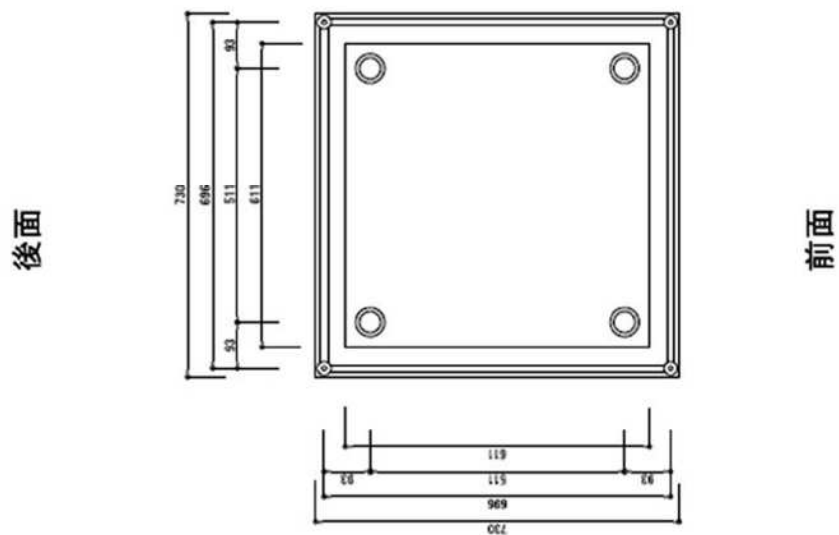
花神輿 鳳凰 正面図(上) 側面図(下)



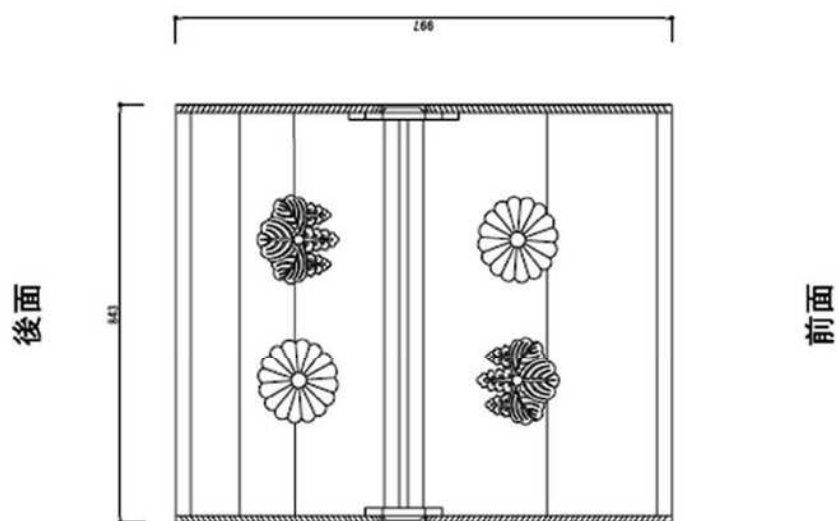
花神輿 鳳凰 背面図(上) 上面図(下)

花神輿

獅子神輿 基壇・胴 平面図

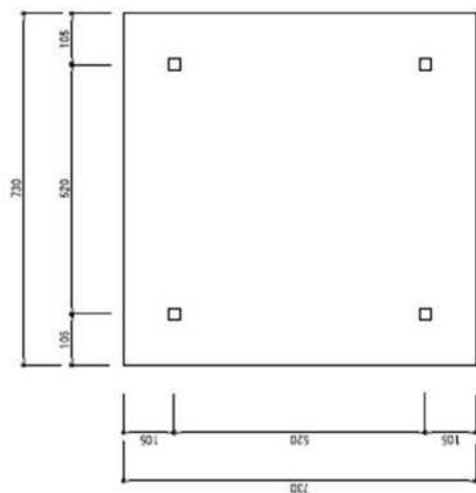


獅子神輿 屋根伏図





後面

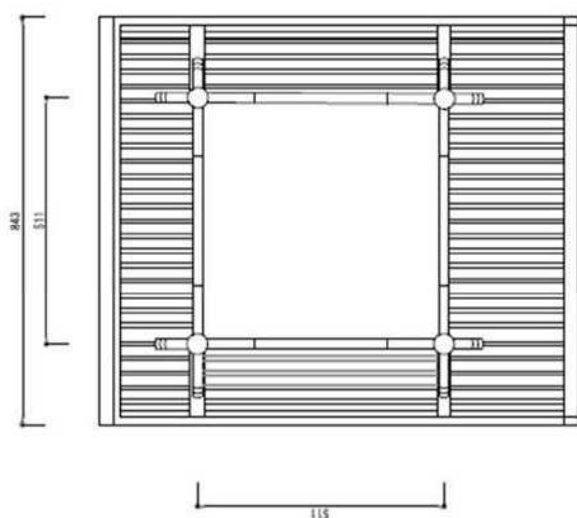


前面

獅子神輿 基壇 見上図

獅子神輿

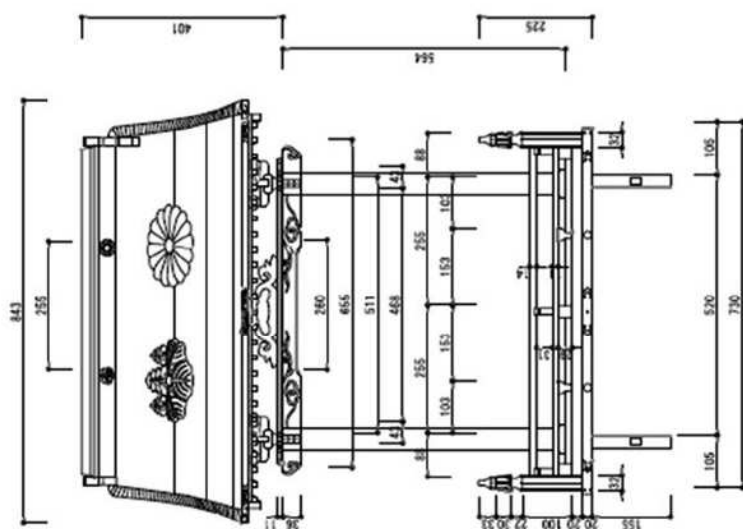
後面



前面

獅子神輿 天井見上図

獅子神輿 背面 立面図



獅子神輿 正面 立面図

